

最終報告書レポート

ASEANと南シナ海

1. 活動概要

ASEANの中でもフィリピンとベトナムは南シナ海内に存在する島の領有権をめぐって中国と対立しており、その結果として海洋法の基本概念である「航行の自由」が揺らごうとしている。しかし、この「航行の自由」に関しては、フィリピン、ベトナム両国のみならず、これまで対中姿勢に関しては比較的中立的立場を取っていたマレーシアやインドネシア、そして華人の多いシンガポールにおいても次第に警戒感が高まっている。これらの国における有識者や政策担当者との意見交換をしてネットワークの拡大に努めるのが、今回の訪問の目的であった。

まず、マレーシアである。近年では、マレーシアも南シナ海問題に鋭敏になってきたと言われ始めている。ボルネオ島側のサラワク州やサバ州付近に中国の公船が出現してスワロー礁（Swallow Reef）の領有権を主張しており、その結果、警戒感を高めているということを知った。

しかし、そのイメージはクアラルンプールに到着して調査を始めると、間もなく消滅した。私が滞在中に会った研究者は押しなべて南シナ海問題は「重要だ」としながらも、マレーシア政府が中国に対して対抗意識を持ち出して、具体的な抑止政策を展開したり、具体的に中国船を追い払ったりするわけでもなく、現実的には徐々に中国の海洋進出を是認していくような外交態度を取るだろうという話であった。

次に、インドネシアである。インドネシアにはマレーシアにとってのマラッカ海峡のように、国際海峡として位置づけられているバリ海峡、そして近年大型タンカーが通過するスダ海峡等、交通の要諦となっている地域が多い。インドネシアにとって中国がナツナ諸島（天然ガスの産出地）の排他的経済水域（EEZ）にまで進出してきたことは、南シナ海問題に関して自国が当事者であることを再認識させることとなった。中国の主張する九段線と、インドネシアが主張するEEZとは重複しており、中国が武装船を派遣して中国船を奪還に来た際にはインドネシアにおける対中警戒心は一気に高まることとなった。

興味深かったのは、インドネシアが国土の広い島国であることから、外交政策が国内の様々な勢力の凝集力として用いられているという指摘であった。中国によるナツナ諸島への進出に対して強い声明を出したことは、その現れである。加えて、東シナ海と南シナ海にだけ目を奪われると、実は全体像が見えなくなってくるという話を聞いた。現実にインド洋やポリネシア・メラネシア地域に中国船は膨大な数で進出しており、今や中国船による領海侵犯は世界中で常態化している。

最後にシンガポールである。シンガポールは自らの態度を明確に出すよりも、周辺国の意見聴取に努めることが多く、私もシンガポール大学アジア研究所での国際会議に参加して、意見交換に努めた。

フェローシップ全体のまとめとしては、ASEAN諸国は押しなべて中国の台頭に対する警戒感が強い。それは中国が大きくなってきているからというよりも、自らの小さな国力では対応する手段が限定されているという一種の「諦め」に似た感情に起因している。但し、中国が「力による現状変更」をしているから日本に対する親近感が強いという、単純なものではない。経済的な大きさでは日本に対しても大なり小なり警戒感はあるはずである。自らのパワーの限界を前提として、どのように日中両国、さらには海を隔てたアメリカと友好関係を築いていくかが、彼らの外交政策における究極的な目標なのである。その意味で、「対抗」や「抑止」という概念と同時に、「危機管理」をどうやって上手く行うかということに重点があるようだ。



写真 1：シンガポールでの国際会議の様子

2. 訪問先との関係

まず、共同研究をやろうという案はいくつか存在する。マレーシアでは、今から10年ほど前に私のところで学位論文を書いた卒業生が現在首相官邸に勤務しており、マレーシアとASEAN全体の今後の経済政策に関するプロジェクト、また新興国における所得再配分と高等教育との関連についてのプロジェクトを打診された。

インドネシアにおいては、インドネシア大学国際関係学科から日本・インドネシア関係に関するプロジェクト、そして大学間交流を一層拡大して学生の相互派遣、研究者交流に関する案件を話し合った。また、CSISとは定期的に海洋安全保障に関する意見交換を行いたいとのことであった。

シンガポールは、シンガポール国立大学との間ですでに定期的な意見交換を行っているが、これをもう少し拡大したいという話があった。

以上、訪問先との関係は概ね良好であるが、これらの機関は本フェローシップ受託前から懇意であった間柄である。今後の課題は、単に懇意であったというだけでなく、実際に共同研究を実現することであろう。

3. フェローシップ活動記録



写真2：マレーシアで最初に招かれた夕食会

マレーシアでは、University of Malaya、Universiti Kebangsaan Malaysia (UKM)、CSIS、Putrajayaの首相官邸等を訪ねた。人づてに面会相手を紹介されることが多く、その意味で何もコンタクトがない状態で来ると、かなり情報を取るのが難しいのではと感じた。また、一日だけジョホール・バルに赴いた。

インドネシアでは、CSIS、インドネシア大学、日本大使館等を訪ねることができた。何度か講演を行ったが、インドネシアの学生は大変優秀であることに気づいた。

最後にシンガポールに向かった。シンガポールはフィールドの対象国としても有益であるが、本来アジア研究・国際関係論研究においてアジアにおける研究拠点の一つであり、ASEANに関する研究について内外の文献が集積し、また有能な研究者交流が可能なところであった。シンガポールは本フェローシップ期間中一週間もない短い期間であり、その意味で東アジア研究所の研究員たちと意見を交わす以外の活動は時間の都合上できなかった。しかし、一度の国際会議で得られる情報は多くあり、現行の中国・ASEAN関係について広く意見交換を行うことができた。

4. フェローシップ活動を終えて

本フェローシップは、調査と同時に交流の意味合いも含まれているので、これまで私が行ってきた調査のみを集中的に行うという訪問方式を改め、時には食事を交えながら意見交換を行い、そこから新しい人物を紹介してもらおう方式を取った。その意味で、普段にない大変有意義な活動を行うことができた。

本報告書の締めくくりとして、東南アジア特有というか、直面した困難を三点紹介したい。第一に、連絡を取ったときの返事の遅さである。まず、メールを送っても新しい相手の場合、返事が来ない。何度も送って、せつついてやっと返事が来る。それでもアバウトなアポが大体である。現場主義というか何とと言うか、行ってみないと分からないことが多くある。だから、フェローシップの意義があるのだろう。

第二に、マレーシアでは、ずいぶんタクシー運転手に日本の批判をされた。マハティール時代の良好な関係はどこに行ったのだろうか。マレーシア訪問中、一度だけマハティール氏とは一度だけ言葉を交わす機会があった。彼の認識は、私と違っていた。たまたま乗ったタクシーだけがそうだったのだろうか。

最後に、シンガポールは特にそうだが、私が訪問した三国の物価がどんどん上がっていることである。私が東南アジアにやってくるようになって、もう20年近くが経つ。その間の経済発展は目覚ましい。それでも、インドネシアに行くと「わが国はお金がない」と言う。確かにインフラを整備するには巨大資本が要る。そこに中国が入ってくる。大型インフラ案件を、中国が受注することも増えてきた。自分と日本との立ち位置と、今後の戦略を考えるとときに来ていると実感した。

以上